

# 知られざる清水寺

清水寺は「聖地」と「魔界」の交錯する「場所」である。

清水寺は法相宗系の寺院で、広隆寺、鞍馬寺とともに、平安京遷都以前からの歴史をもつ、京都では数少ない寺院の1つである。また、石山寺、長谷寺などと並び、日本でも有数の観音霊場となっている。

778年、大和国興福寺の僧で子島寺で修行していた賢心（後に延鎮と改名）は、夢のお告げで北へ向かい、山城国愛宕郡八坂郷の東山、今の清水寺の地である音羽山に至った。金色の水流を見出した賢心がその源をたどっていくと、そこにはこの山に籠って滝行を行い、千手観音を念じ続けている行叡居士（ぎょうえいこじ）という白衣の修行者がいた。年齢200歳になるという行叡居士は賢心に「私はあなたが来るのを長年待っていた。自分は今から東国へ旅立つので、後を頼む」と言い残し、去っていった。行叡は観音の化身であったと悟った賢心は、行叡が残していった霊木に千手観音像を刻み、行叡の旧庵に安置した。これが清水寺の始まりであるという。

その2年後の780年、鹿を捕えようとして音羽山に入り込んだ坂上田村麻呂（758年 - 811年）は、修行中の賢心に出会った。田村麻呂は妻の高子の病氣平癒のため、薬になる鹿の生き血を求めてこの山に来たのであるが、延鎮より殺生の罪を説かれ、観音に帰依して観音像を祀るために自邸を本堂として寄進したという。805年には太政官符により坂上田村麻呂が寺地を賜り、810年には嵯峨天皇の勅許を得て公認の寺院となり、「北観音寺」の寺号を賜ったとされる。『枕草子』は「さわがしきもの」の例として清水観音の縁日を挙げ、『源氏物語』「夕顔」の巻や『今昔物語集』にも清水観音への言及があるなど、平安時代中期には観音霊場として著名であったことがわかる。

なお、清水寺の境内には、「阿弋流為（アテルイ）と母礼（モレ）の碑」がある。これも清水寺の聖性を示すひとつの記念碑であるので、この際、それを紹介しておきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/ateruinohi.pdf>

清水寺は、以上のとおり全国有数の「聖地」である。それを次の素晴らしい動画でじっくり味わって下さい！

<http://feel.kiyomizudera.or.jp/>

清水寺は全国有数の「聖地」であると同時に全国有数の「魔界」でもある。「聖地」必ずしも「魔界」と限らないが、「魔界」は必ず「聖地」でもある。そういう意味で、これから清水寺の知られざる魔界性について説明をしたい。まず、次の地図をクリックして欲しい。先に述べたように、「六道の辻」のアースダイバー地図を念頭にいうならば、「六道の辻」からつづく松原通は、三年坂を経て清水寺の谷筋に至るが、ここも「六道の辻」と同様に縄文時代からの死者の埋葬地であったのであり、まずその地理をしっかりと認識してもらいたい。

[http://www.mapion.co.jp/m/basic/34.991062279636516\\_135.78629017990048\\_9/t=simple/icon=home,139.76050277,35.69250555](http://www.mapion.co.jp/m/basic/34.991062279636516_135.78629017990048_9/t=simple/icon=home,139.76050277,35.69250555)

さて、この地図に「お休み処六花亭」というのが見えるが、その右側に、昔、鶴の塚といわれる「毛朱一竹塚（もうしゅいちちくつか）」というのがあった。この「毛朱一竹塚（もうしゅいちちくつか）」について、私の尊敬する小松和彦（[国際日本文化研究センター](#)の所長）がその著「京都 魔界案内」（2002年2月、光文社）の中で次のように述べている。すなわち、

『三年坂にも、さまざまな理由で俗世間を離れた、「坂の者」などと呼ばれることになる「無縁の者」たちが住み着いた。そんな人びとの間で語り出されたと思われるのが、たとえば「毛朱一竹塚（もうしゅいちちくつか）」をめぐる伝承である。平清盛は清水寺に参籠して夢を見た。ある人に占わせると吉夢だという。果報を待つこと7日、内裏の宿直（とのい）に当たっていた時、鶴とおぼしき怪鳥が出現して、闇の中を飛び回った。清盛はこれを捕獲すると、小さな未知の鳥であった。これを占った陰陽師は、これもまた吉と判じた。そこでこの怪鳥を大きな竹の筒に入れて、清水の岡に埋めた。これによって清盛は安芸守（あきのかみ）に昇任した。また、天皇が病気になったときには、この塚に勅使が来て、病気平癒の祭儀をしたという。「源平盛衰記」に見える話であるが、一説によれば、陰陽師にこの鳥の正体を占わせたところ、「毛朱」といって年老いた鼠の化け物であると判じたという。天皇が病気のときに、ここに勅使が来て祭祀めいたことをしたというのだから、きっと塚に葬られた妖怪のたぐいが祟（たた）りをなしたと判断したのだろう。この塚は大正の頃まで三年坂の崖にあったという。つまり、平安時代から中世においては、このあたりは、退治されてもお祟るような、恐ろしい妖怪の埋葬地であったのである。』・・・と。

清水寺は「聖地」と「魔界」の交錯する「場所」であることを示す根拠としては以上の鶴の話で十分かも知れないが、念のため、もうひとつ清水寺の境内にある地主神社で行なわれていた「丑の刻参り」の話を付け加えておきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/jishujin.pdf>

なお、小松和彦はその著「京都・魔界案内」（2012年9月、光文社）の中で、清水寺に関連する話として説教節の「しんとく丸」の話があると言っているので、説教節の「しんとく丸」について少々触れておきたい。

まず、説教節の「しんとく丸」の四天王寺に捨てられるまでの話は、次のとおりである。すなわち、

『 河内国の高安（今の大阪府八尾市高安山のふもと）の信吉長者は金持ちで何の不足もなかったが、前世での悪行の報いで子宝にだけは恵まれなかった。そこで、信吉長者夫婦は京都東山の清水寺に参り、観音に申し子して、子を授かった。

生まれた男の子は、「しんとく丸」と名づけられた。しんとく丸は9歳になると、三年の間、信貴（しぎ）の寺に預けられ、学問を学ぶこととなる。信貴の寺で一番の学者となり、河内国高安に戻ってきたしんとく丸は、天王寺の聖霊会（しょうりょうえ。陰暦2月22日、聖徳太子の命日に営まれる法会）で稚児舞を舞うこととなり、その折、客席にいた和泉国近木の庄（こぎのしょう。今の大阪府貝塚市北西部）の蔭山長者の娘・乙姫に一目惚れ。信吉長者の家来の働きで文を取り交わして結婚の約束を取りつける。しんとく丸は大喜びだったが、そんなとき、しんとく丸の母が亡くなってしまう。しんとく丸は持仏堂にこもり、母の菩提を弔う。信吉長者はまもなく新しい奥方を迎え、新しい奥方はじきに男の子をもうけた。新しい奥方は、しんとく丸がいるために我が子を信吉長者の跡継ぎにできないのが口惜しく、都に赴き、都中の寺社を駆け巡り、呪いの釘を打ち込んで、しんとく丸に呪いをかけた。

しんとく丸は継母の呪いのために目が潰れ、ライ病となり、天王寺に捨てられる。』

・・・というものだ。

ここで小松和彦が注目するのは、しんとく丸の継母（ままはは）が最初に呪いの釘を打ち込むのが清水寺であるということだ。小松和彦は、説教節「しんとく丸」のその場면을小松和彦は、次のように紹介している。すなわち、

『 清水坂の鍛冶屋に宿を取った継母は、沢山の六寸釘を作らせ、その釘を観音の前に立つ木に、縁日にちなんで18本も打ち込んでしんとく丸を呪ったのである。』・・・と。

説教節「しんとく丸」では、その継母は祇園神社、御霊神社、今宮神社、北野神社、東寺の夜叉神堂（やしやじんどう）などにも駆け巡って呪いの釘を打ち込んでいるので、説教節が語られた鎌倉時代から室町時代にかけては、清水寺だけでなく、ひろく「丑の刻参り」が行なわれていたようだが、やはり清水寺が歴史的にも古く、有名だったようだ。清水寺にも「夜叉神堂」があるが、小松和彦はこれも「丑の刻参り」のためののものであると、「京都・魔界案内」の中で言っている。しかし、その実体を明らかにする資料はない

ので、清水寺における「丑の刻参り」についての説明は、清水寺・地主神社のものにとどめておきたい。

説教節「しんとく丸」は四天王寺に伝わる「俊徳丸伝説」が元になっているが、四天王寺の俊徳丸については中沢新一がその著「大阪アースダイバー」（2012年10月、講談社）で哲学的な取り上げ方をしている。四天王寺の聖徳太子の思想をアポロンの軸、俊徳丸の思想をディオニュソスの軸と言い、それらの軸が四天王寺で垂直に交わっているなどと大変難しいけれど極めて大事なことを言っているなので、私としては、いずれ機会を見てその解説をしたいと考えている。乞うご期待！